社会的スキル概論

－「社会的スキルと交通」の特集にあたって－

新井邦二郎*

社会的スキル（social skill）とは、心理学の分野において、すでに定着を見た概念であるが、他の分野の方にはまだ比較的耳新しい言葉だと思う。まずその言葉の意味から説明し、その上で、交通場面で、それがどのように適用し得るかについて述べたい。

1．心理学における社会的スキル

心理学では「個人が社会的場面において他者と効果的に相互作用（交渉）するために、その個人によって用いられる言語的・非言語的な行動」を社会的スキルと呼び、個人が社会的不適応に陥らないために学習や経験によって獲得していかなければならないものとして理解されている。

例えば、子どもの成長・発達を扱う発達心理学や児童臨床心理学では、「友だちと遊ばない子ども」がホットなトピックスのひとつになっており、その心理面や環境面および教育・治療面の研究がさかんに行われている。曰く、そうした子どもは、「生得的に高い対人不安傾向をもっているのではないか」、あるいは「0歳から2歳ぐらいまでの乳児期の対人接触経験が著しく欠けていたためではないか」といった指摘もなされている。しかし、「友だちと遊ばない子ども」の日常生活を観察すると、友だちと遊ぼうとする気持の不足に気がつくばかりでなく、友だちと遊ぶうえで必要となるような技能・技術の不足も目立つ。例えば、すでに数人の幼児が遊んでいる輪の中に新しく加わろうとする時、要領のよい子は「入れて！」とリズムをつけて言いながら入ろうとするが、ふだん「友だちと遊ばない子ども」は無言のまま入ろうとしたりする。そうした場合、「遊び仲間」として認知されることなく、いつの間にか遊びの輪の外に追いやられてしまう結果になる。この事例から理解されることは、「友だちと遊ばない子ども」は、「友だちと遊ぶ意欲の少ない子ども」であるかもしれないが、それと同時に、「友だちと遊ぶ技能（スキル）の低い子ども」でもあるということである。どのような行動をすれば遊びのなかに入れてもらえるか、あるいはまた、どのような言葉を使えば友だちから好かれるのか、といった心の使い方とその結果としての具体的な行動ができないために、またそれらが下手なために友だちと遊ばない子どもになったと考えることができるのである。

社会的スキルに着目するアプローチは、教育・治療面において大きな意味がある。先の事例では、「友だちと遊ばない子ども」の原因を、その子どもの生得的気質や生育歴などによる人格面に帰しても、その教育や治療に直接に役立つようなヒントは生まれにくい。子どもの人格面に何らかの原因があるにしても、とりあえずはそれに触れないで、友だちと遊ぶスキルを教え、それに上達・熟達するようにトレーニングを行っていくのである。

私たちは、ふだん「社会性」という言葉はよく使う。「付き合いの悪い人」や「自分のことばかりを主張する人」「年相応の気配り、言葉遣いのできない人」を「社会性」が欠けているなどと言って、非難する。改めて考えてみると、この「社会性」のなかにも、「他者との関係を大切にしようとする人格」と「円滑な人間関係を作るうえで必要な技能、技術」の2つの面が含まれていることに気づく。社会的スキルは、この「社会性」のなかの主に技能面に相当すると考えられる。

以上、具体的事例をあげて、心理学での社会的スキルの捉え方を説明した。次に、この概念が交通場面にどのような適用性があるかについて、述べてみよう。

＊筑波大学心理学系教授
Professor, Institute of Psychology,
University of Tsukuba

2．交通場面における社会的スキル

「赤信号、みんなで渡れば、怖くない」。この言葉は、日本社会の「たてまえ」と「本音」、「おもて」と「うら」の二重性を皮肉ったブラックユーモアとも言えよう。それはまた、「たてまえ」や「おもて」を気にして、「本音」や「うら」を実行するときに誰もが持つ一種の「うしろめたさ」をカタルシス（浄化）したという意味において、「時代の名文句」と高く評価する人すらいる。この言葉が、老若男女を問わず広く人々のなかに受け入れられていったのは、「おもて」の世界でも「たてまえ」にとらわれずに「本音」で行動したいという気持を多くの人が抱き始めてきたからだと思う。実際、道路では、信号を無視していく歩行者や自転車、ところかまわず駐車する車などがあとを絶たないどころか、年々、ますます増大している。それゆえ、交通戦争と言われるものの真の内実も、車やバイク、自転車や歩行者などの交通参加者が、いわば本音やさらにそれを越えたそれぞれのエゴを露呈して道路を往来することに由来するところが大きいとも言える。

このような人々の本音で行動したいという意識の変化に対して、「交通ルールやマナーを守りましょう」といった「たてまえ」だけを訴える交通安全運動が急速に無力化していったのは、やむを得ないところであった。そこで、交通安全運動も、交通参加者の「目くばりや気くばり、心くばり」を強調するものに次第に切り替わっていった。「自分が赤信号を無理して渡ったら、そこを通過しようとしている相手はどうなるのか。自分が、相手の立場であったら、いい気持はしない。じゃ、無理して渡るのは止めようよ」。「たてまえ」だけでなく、このような本音の部分に訴えるような問いかけをして、エゴの出しすぎにブレーキをかけようとしているのが、現在の交通安全キャンペーンである。

法規や道徳ではなく、生活レベルでの本音のところで交通のあり方を説く際の、理論的枠組みとなるものは、何であろうか。我田引水になるかもしれないが、その答えは、社会的スキル論であると思う。

3．社会的スキルと セイフティ・コミュニケーション

交通安全の分野では、「セイフティ・コミュニケーション」という概念がすでに提唱され、一定の定着をみている。また、最近では、「カー・ボディ・ランゲージ」という言葉も提案されており、好評を得ている。これらの２つの概念は、使用される文脈に多少の違いがあろうが、「交通参加者の意思の伝達・交流」を主たる内容としている点では基本的に共通している。仮に、これらの概念と社会的スキルとが、ほぼ同じであるならば、まさしく屋上屋を架す愚をおかすことになるので、是非ともそれらの概念の異同を明確にしておきたい。

正直に言って、これらの概念の間に共通性はたくさんある。「セイフティ・コミュニケーション」や「カー・ボディ・ランゲージ」も、社会的スキルも、安全で快適な交通の実現のために他の交通参加者と相互作用（交渉）を行うという目的は基本的に共通しているし、使用される行動様式についても言語（音）ばかりではなく非言語的な行動（身体や乗り物の動かし方、手によるジェスチュアーや顔の表情など）を共に含んでいる。また、法規や道徳といった社会的に昇華された次元での行動を指すよりも、日常生活のレベルでの行動を広く内容としている点も、同じである。このように、目的や手段及び行動の次元やレベルはいずれも基本的に共通している。例えば、「薄暗くなる前にスモールランプをつけ、薄暗くなったら早めにヘッドランプに切り換える」といった行動は、自分の車の存在を周りの人に知らせるという点で、「セイフティ・コミュニケーション」や「カー・ボディ・ランゲージ」でもカバーされるし、他者との効果的な相互作用（交渉）という点で社会的スキルでもカバーされる。しかし、「あとで出やすいことを考えたら道路に駐車したいが、ほかの人の迷惑を考えたら、お店の駐車スペースに車を止めておこうか」といった行動は、「セイフティ・コミュニケーション」や「カー・ボディ・ランゲージ」のなかには含まれてこないが、社会的スキルには入ってくる。こうしてみると、社会的スキルには交通参加者の意思の伝達・交流の行動ばかりでなく、他の交通参加者と関わりをもつそのほかの運転行動全般も含まれてくる。その意味で社会的スキルは「セイフティ・コミュニケーション」や「カー・ボディ・ランゲージ」と重複するところが大であるが、それらよりも広い内容を持っていると言えよう。

最後に、社会的スキルの内容を一言で言いあらわすような言葉を提示したい。「人に嫌がられることは止めようよ。自分も人も納得できるような運転をやろうよ」。このことが、結果的に安全で快適な交通社会の実現につながることを期待したい。